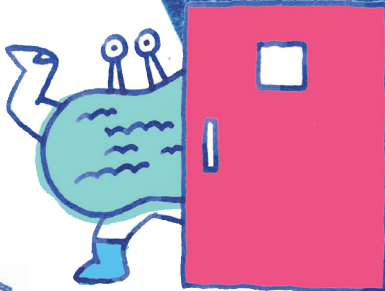


じぶんの地域と

もう一度出会う

10の扉



つながる湾プロジェクト

プロローグ



ぼくは海崎ヒデアキ。職業、グラフィックデザイナー。東京での勤務に疲れ、故郷・塩釜に帰ってきた。



ただいま

今は家族3人で暮らし、仕事は仙台に通っている。



塩釜は松島湾に面する歴史ある港町だが、



お前、みなとまつりは行くのか？

特に面白いことがあるわけでもなく、淡々と暮らしていた。

行くよ
おう、ウチの弟が神輿担ぐからよろしくな



そんなある日――。
アーティストが作った小舟で



湾内を巡ることができると聞き、なんとなく参加してみた。

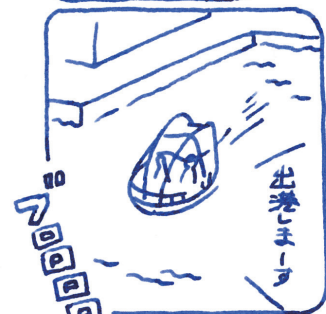
こんにちは――



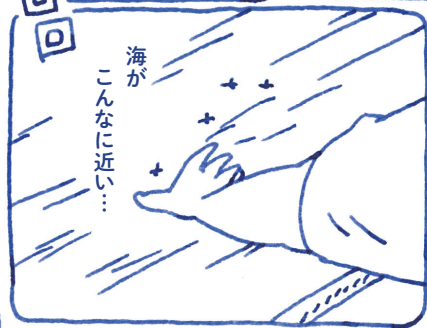
変な舟だな……



出港しまーす



海がこんなに近い……



風もキモチイイなあ

ほら！塩釜の町が見えますよ！

ん？

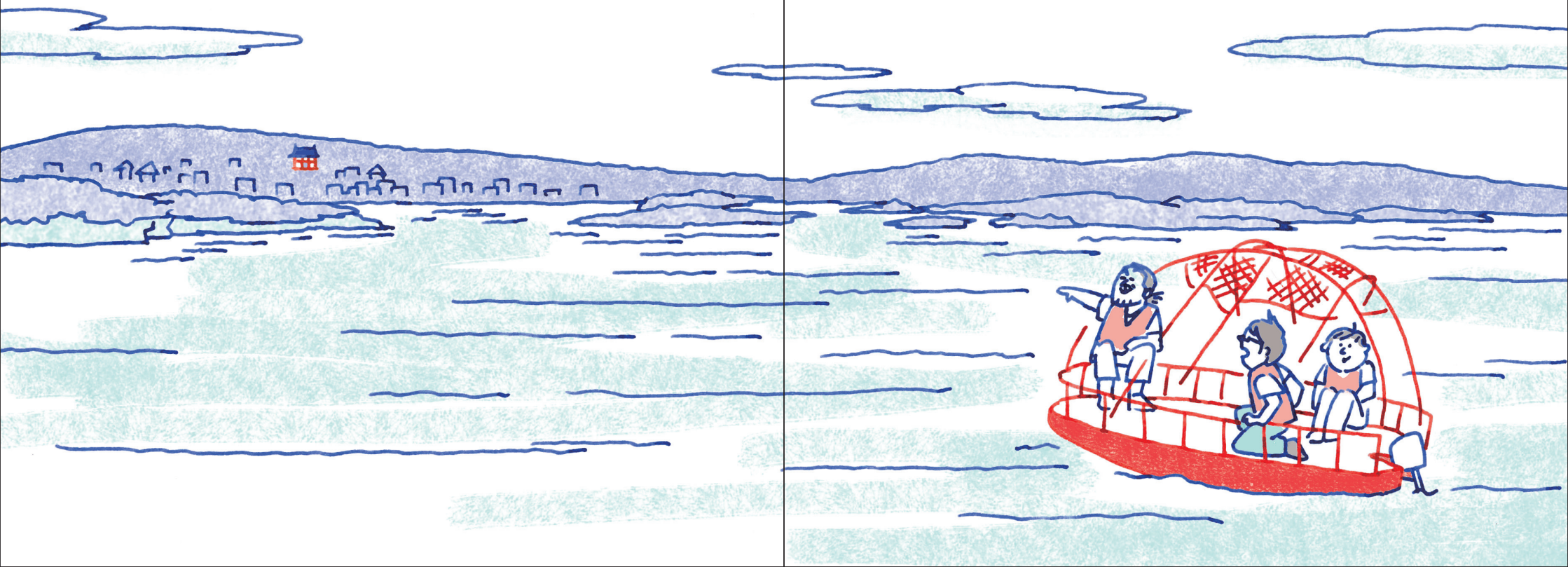


※2013年、日比野克彦氏監修による「種は船」プロジェクトの「TANE FUNE」が約4ヶ月間、松島湾に滞在した。 <http://tanefunne.com>

その舟から陸を見た時。
丘陵地に家々が散らばる姿と、
その頂に佇む塩釜神社。

水面近くから
海と一体になって見上げると、
よく知っていたはずの場所が、
まるで違うものに見えた。

良く知っているのに
全く新しい場所と
出会ったような、
不思議な感覚だった。





突然、自分の身の周りの世界が、
それまでとまるで違って
見えてくることがある。
それは、ちょっとしたことを
きっかけに起こる。
世界はある日突然変わるのかな？
いやいや、そんなことはない！
たぶん、それまで
世界を「そういう風に」
見ていただけなんだ。
あなたの見方が変わったとき、
「あなたにとっての世界」が変化する。
大げさなことじゃあない。
ほんのちょっとしたきっかけで、



ぐっと面白くなる。

だけど残念ながら、きっかけは
気まぐれにしかやって来ない。

でもちょっと工夫すると、

きっかけが増える。

この本では、

僕らが「こうすれば、

世界が変わる扉が

開くんじゃないかな？」と思って

やってきたことを紹介している。

ちょっと気をつけて

動いてみたら、

君にもきっと、

世界が変わる扉が開くよ！



この本の 舞台と 登場人物

松島

日本三景として有名な観光地。
伊達政宗の菩提寺などがあり、
歴史的文化財が多い。

松島湾

宮城県の中ほどに位置する湾。
全体に小さな島がたくさん浮か
ぶ景観が広がり、「多島海」と
呼ばれる。

浦戸諸島

松島湾の入口に浮かぶ島々。人
が住む島が4つあり、学校もある。
塩釜と定期船で結ばれている。

【松島湾の特徴】

波が穏やかなので海水浴、カヤ
ックなどができる。プランクト
ンが豊富で海苔や牡蠣の養殖が
盛んなほか、魚、カニ、アサリ
なども獲れる。



海崎ヒデアキ (右)

塩釜出身の45歳。近隣の大都市
である仙台の会社で社内デザイ
ナーとして働いている。穏やか
な性格で、争いごとは苦手。

海崎ナツミ (中)

ヒデアキとマユミの娘で小学校
6年生。絵を描いたり工作をし
たりするのが好き。ヒデアキに
似て穏やかな性格だが、芯はし
っかりしている。

海崎マユミ (左)

ヒデアキの妻。ヒデアキが東京
で働いていた時の同僚。現在は
書店でパートをしている。出身
は九州。

塩釜

古代から港として栄えた場所で、
風情のある建物が多く残る。塩
作りの神様が祀られた塩釜神社
がある。

多賀城

古代、大和朝廷が東北平定の拠
点としていたところ。跡地が遺
跡になっている。今は仙台のベ
ッドタウン。



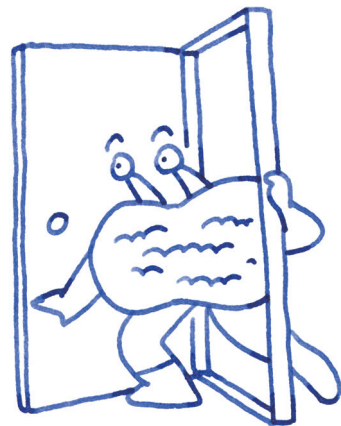
仙台

東北最大の都市で、人口100万人。
伊達政宗が築いた城下町として
有名。

この本で描いているストーリー
は、実在の場所・人物をモデル
にしたフィクションです。



JUMP!



STEP!

KNOCK!

解説 ドアをノックするのは誰だ? ……………

P82

つながる湾プロジェクトについて ……………

P61

エピソード ……………

P53

扉10 手紙を書く

扉9 恒例行事にする

扉8 食べてみる

扉7 地図を描いたり、スゴロクにしてみる

扉6 物語や歌にしてみる

ジブンゴトに変わる扉 ……………

P37

扉5 違う道を通ってみる

扉4 季節・時間を意識してみる

扉3 地域の先輩の話を聞く

もっと良く知る扉 ……………

P23

扉2 新しいメガネをかける

扉1 よそ者の話を聞く

自分が住む地域と
出会い直す扉 ……………

P15

プロローグ ……………

P03

KNOCK!

自分が住む地域と 出会い直す扉

人はだいたい、自分が住んでいるところを悪く言う。
古女房と同じで、一緒にいすぎて
いいところが分からなくなっているからだ。



松島湾に小舟で出た
体験を家族にも伝えたくなった
ヒデアキは、
マユミとナツミを誘った。

ホントだ「ねー
キモ4...!!



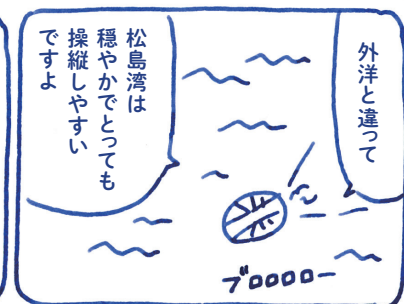
ねえそうでしょう！

この露面の船長は金沢出身で、
今は松島湾に滞在しているが、その前は
同じ舟で日本海を旅していたらしい。

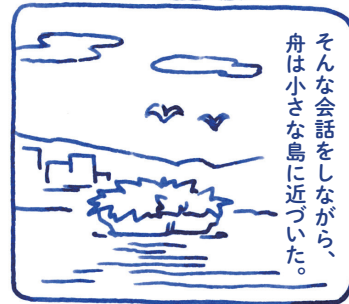


外洋と違って

松島湾は
穏やかでとても
操縦しやすい
ですよ



そんな会話をしながら、
舟は小さな島に近づいた。



あそこに
鳥居が見える？
あれ曲木神社



鳥居がこつちを
向いてるでしょ？
つまり、
海から参拝するように
作られたんですよ

※「塩釜神社」は正式には「鹽竈神社」と書く。

まがき
曲木神社は
14ある塩釜神社の
末社の一つでー

キラーン

海から
塩釜を見たときの
表玄関なんです



その話を聞いて
「なんてドラマチック
なんだろう」

と、ヒデアキは思った。

塩釜神社は
小さい頃から

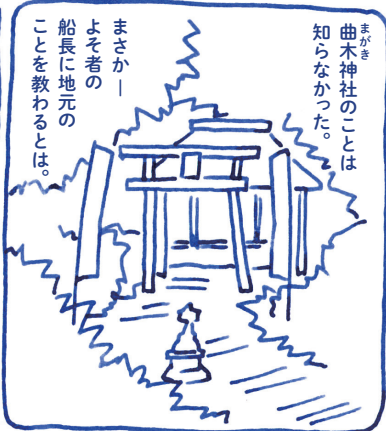


慣れ親しんだ
地元の神社で

お祭りにも
いつも行っていたがー

まがき
曲木神社のことは
知らなかった。

まさかー
よそ者の
船長に地元の
ことを教わるとは。

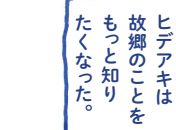


海から見ると、陸で
生活していたら見えない
ものが見えるんです。
だから僕は、
それを伝えるために
海を旅します。



なんつって!!

ヒデアキは
故郷のことを
もっと知り
たくなった。





よそ者の話を聞く

他の土地から
やって来た人の話を聞いてみよう。できれば、
いろいろなところを旅している人がいい。
よそから来た人に、
この土地はどんな風に見える？



新しいメガネをかける

新しいメガネをかけると、
世界が明るくなった気がする。
眼じゃなくて心にメガネをかけても、
同じことが起きるよ。

STEP!

もっと よく知る扉

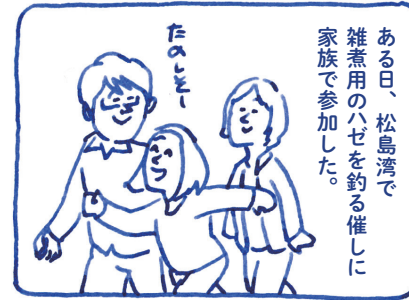
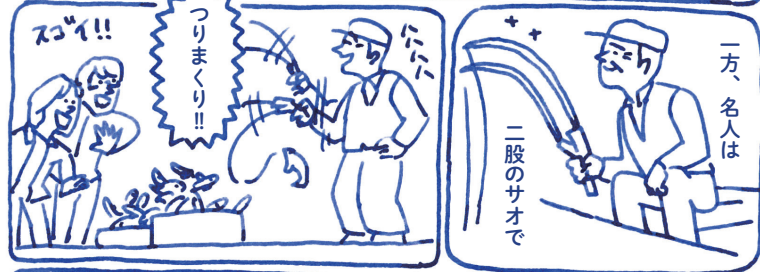
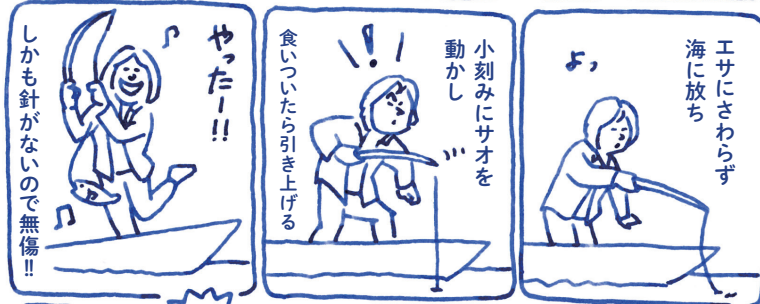
自分が住む場所の違う顔が見えてきたら、
どうしてそういう顔をしているのか、
他にどんな顔があるのか、
もう少し詳しく知りたくなるはず。



〈コラム①〉

視点を变えるコツ

視点を变えるコツは、簡単にいえば「不自由になること」だと思う。これは、これまで自分の視点が大きく変わった時に共通する出来事だった。僕はこれまで、さまざまな国や地域で活動し、太平洋や日本海を航海したり、福祉施設と交流したり、身体的にも精神的にも、近くから遠くまでいろいろなところを旅してきた。異国の地では言葉が通じなかったり、海の上では足元が不安定だったり、福祉施設ではコミュニケーションができなかったり、いろいろなと不自由なことが起きる。そんな不慣れな環境に身を置いたとき、人は弱者となり、それまでの自分のやり方や常識やあたりまえを、一度捨てざるを得なくなる。そうして裸の自分と向き合ってみる。すると、自分の中の視点の変化に気付けるようになる。最初はストレスもあるし、なかなか勇気がいることで、積み上げたものが多い人ほど捨てるようになるもの。だからこそ、自分にとって不自由な状況こそ、これまでの自分から自由になり、新たな視点を手にいれるチャンスなのである。(アーティスト・五十嵐靖晃)



地域の先輩の話聞く

周りを良く探すと、気になっていただけ
良く知らないあのことに
とても詳しい人がいたりする。
地域の先輩は、あなたが瞳を輝かせて
話を聞きに来るのを待っている。



たとえば、勉強会を開いたり、



もうちょっと頑張って、技を教えてもらったり、





〈コラム②〉

地域の先輩とつながる

あなたの周りに「地域の先輩」はいるだろうか？もしかすると思いたらないかもしれない。思い当たっても、話をするには遠い存在だと感じるかもしれない。でも本当は、自己と先輩は共通の旗印をもつパートナーなのだ。大きな時間の流れの中で考えれば、先輩も私もあなたも、この地域が始まった大昔から今に至るまで、さらには遠い先の未来にまで流れる時間の河の一部だ。この流れを次の人たちに伝えるという、同じ役目を持っている。地域の神社のお祭りがあれば、関わってみるとよい。地場産品の職人や、地域の歴史に詳しい人がいたら、話を聞いて見るとよい。それらは、長い時間をかけて紡がれてきた地域の文脈を背負っている。文献や写真には遺っていないことを自分の感覚で聞き出し、自分の言葉に留めることができた時、自分を生み育ててくれた地域との一体感を味わうことができる。そのために先輩とつながる。一体感がかげがないのよこびだ。それが、地域の先輩とつながる楽しさなのだ。（つながる湾プロジェクト・津川登昭）

季節・時間を意識してみる

同じ場所でも、
季節や時間が違くと、
びっくりするほど違う表情になる。
意識して、いつも見ていない
季節や時間に触れてみよう。



違う道を通ってみる

あなたの住む町には
たくさんの方が暮らしているのに、
日常の中で出会える人は限られている。
いつもは出会えない人に出会おうと、
「いつもの町」に奥行きが出てくる。



JUMP!

ジブンゴトに 変わる扉

詳しく知るだけじゃあまだ面白くない。
聞いたことを自分の感覚で味わえば、
ヒトゴトがジブンゴトに変わる。ここまで来れば、
あとはどんどん、面白くなるはず。

before



after



〈コラム③〉

松島湾の季節の営み

松島湾では、古来変わらない景色と人の営みが重なり合い、季節や時間によってさまざまな表情を見ることが出来る。春、芽吹いた草木に次々に花が咲き、景色に彩りを添える。浦戸諸島では仙台北菜の種を採取する黄色い菜の花畑が風物詩となっている。海岸沿いでは椿が赤い花をつける。夏、日差しが海面を輝かせる。海水浴やレジャーに訪れる人で、沿岸部は一年で一番賑やかになる。塩釜の港まつりでは、百隻に及ぶ大小の供奉船を従えたお神輿が海上巡幸する。秋、湾内に海苔養殖の竹竿が整然と並び立ち、牡蠣も産卵の時期を迎える。波の静かな夜には、湾にのぼる月が美しい。松島には伊達政宗公が月を眺めた逸話が残し、今も同じように月を眺めることができる。冬、雪の松島。海から眺める陸地も、湾に浮かぶ島々も一面に白くなり、海は静かな佇まいをみせる。漁港では水揚げしたばかりの牡蠣が直売される。あなたの周りにも、自然と人の営みが織りなす季節の風景を見つけてみてほしい。(つながる湾プロジェクト・大沼剛宏)



※1793年に石巻を出港した千石船・若宮丸の実話。



地図を描いたり、
スゴロクにしてみる

あなたに見えているあなたの町を、
地図に描いたりスゴロクにしてみよう。
そうすると自分でも
「こう見えているんだな」と分かるし、
ほかの人にも伝えることができる。





物語や歌にしてみる

学んだことを、物語や歌にしてみるのもいい。
ずっと過去の人や、遠い土地に暮らした人の
気持ちを想像することが出来るから。
そうしたら
それはもう、「あなたの物語」になる。

食べてみる

いつでもどこでも、食べること＝生きること。
かつてあったけれど今は無い味、
その時そこにいた人たちだけが知っている味。
それに近い味を、体験してみよう。

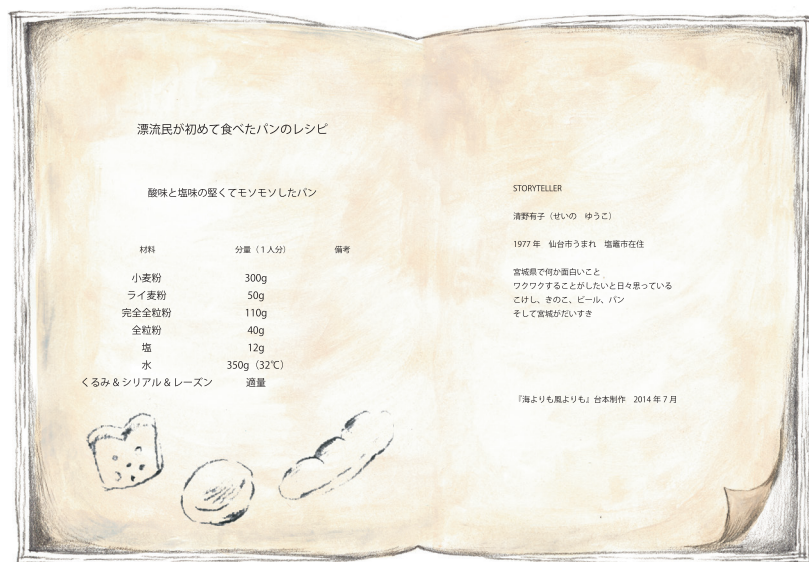


〈コラム④〉

ジブンゴトスイッチを押す

つながる湾プロジェクトが実施する「語り継ぎのためのリーディング」は、自分の地域に潜む物語に出会う、きっかけづくりのワークショップだ。ただ伝承を伝え聞くのではなく、歌や音楽を味わったり、さらには調理や制作活動などに取り組んでもらうことで、想像力をかき立ててもらおうよう工夫している。例えば、遠い異国の地に漂流し、ロシア人からパンづくりを習った220年前の人たちの物語を追体験してもらうため、パン屋さんで粉の調合と味付けを行うワークショップを開催した。こうすると、パンやパンづくりに関心のある人が地域の物語に偶然出会い、漂流民が異なる食文化に遭遇したときの感覚を想像するきっかけを作ることができる。そして終了時には、名前とプロフィール、制作年、そしてパンの味付けのコンセプトとレシピを収めた「語り継ぎの台本」を制作する（左頁写真）。こうすると、その時その人が感じたことを「自分の物語」として記録することができ、それぞれの視点や価値観を収める記録集として、残していくこともできる。

「ジブンゴトスイッチ」を入れるには、五感を刺激することが大切。自分の五感を使うこ



ワークショップの最後に制作する、地域の物語を語り継ぐための「台本」



ワークショップの様子

とで入ったスイッチは、「オン」の状態を長く維持してくれる。先人の知恵や教訓を感じるスイッチを「オン」にして、今を生きる私たちの感覚を添えながら、地域の物語を語り継いでいきたい。（つながる湾プロジェクト・高田彩）

恒例行事にする

あなたの町の文化や習慣で
気に入ったものを、あなたの家の
恒例行事にしてみよう。
伝統も意識するけれど、あなた流に
アレンジして、楽しむことが大切。



塩釜市で毎年7月に行われる「藻塩焼神事」(宮城県指定無形民俗文化財)では、ホンダワラという海藻にかけた海水を煮詰めて塩を作り、塩竈神社に奉納する。

手紙を書く

手紙は、時間や空間を越える。
少し先の未来や、遠い先の未来、
海の底だったり、宇宙の彼方だったり、
あなたの知らないまちで暮らす誰かにも、
手紙は届けることができる。



エピソード

〈コラム⑤〉

タイムマシンは海の底

「海底タイムカプセル」というアイデアが生まれた瞬間、初めて耳にするこの言葉は、妙な心地良さを伴ってずっと頭の中に入ってきた。その感覚は、小学生の時に埋めた、今は所在がわからないタイムカプセルを思い出したためだと思ったが、どうも違うようだ。

「海底は冷蔵庫」。これが、この感覚の謎を解く鍵だった。冷蔵庫は、食品が悪くなるまでの時間を少しだけゆっくりにする。その機能はまるで完璧じゃないタイムマシンだ。整理されていない冷蔵庫の奥の奥から発見されるように、数百〜数千年前の遺跡や沈没船が海底から見つかることもある。また、海底の冷たく、しんとした様子はどこか冷蔵庫の中に似ている。これらのイメージが「海底タイムカプセル」と無意識でつながっていた。

海底タイムカプセルは、海底に手紙や思い出の品を預けるプロジェクト。大きな冷蔵庫は、きつと、今の感覚を新鮮なまま、でも少しだけ形を変えて未来の僕に運んでくれるだろう。（つながる湾プロジェクト・篠塚慶介）

東京から塩釜に戻ってきて10年。
ヒデアキは現状に少し違和感を感じていた。



仙台で
デザイナーとして
職を得ている
ものの、一日中
室内でパソコンに
向かって作業し、
自宅との往復を
繰り返す日々――

カチャカチャ



社内の
さまざまな意見に
右往左往する
ばかりで



自分の仕事で
喜ぶ人の顔が見えない



一方、プライベートでは
松島湾や塩釜のこと
を知ろうとして
積極的に出かけ――

そこで
出会った人たちと
仲良くなった。



彼らは皆
松島湾や
自分の
地域のことを
愛していて



この土地での
暮らしを懸命に
楽しんでいた



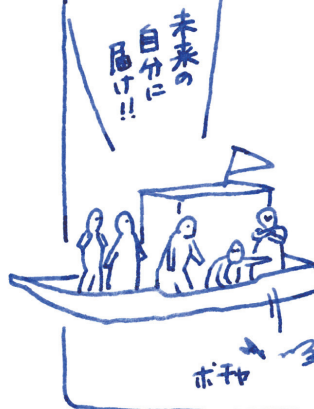
彼らと共に、もっと地元
に密着して生きたいという想いが
強くなっていたが、
繰り返す日々に
流されていた



そんな時、一年前に自分宛で
書いた手紙が届く。

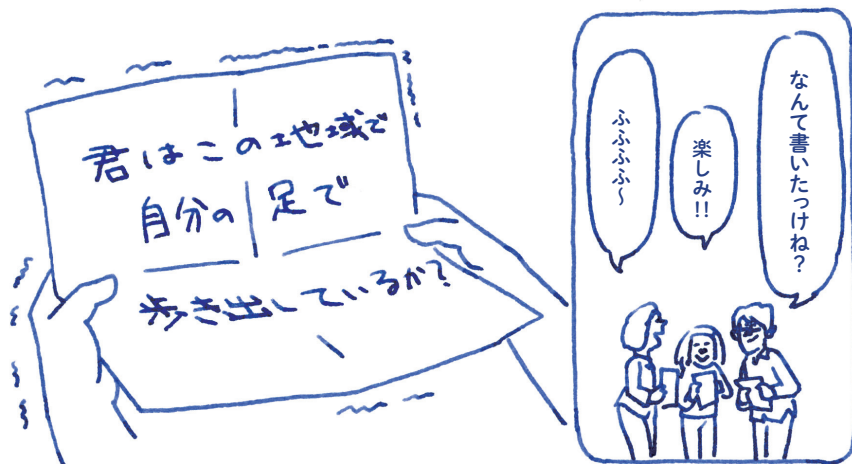


それは、松島湾に
タイムカプセルを
沈めるという企画に参加した
ときのものだった。





※塩釜は美味しい寿司店が多い。ぜひお試しあれ!



あなたは自分の暮らす地域を
「何もない」と
思っていないだろうか。

今あなたが住んでいるその場所には、
ずっと昔から人が暮らしていた。

その人たちは、「何もない」と思いながら
生きていたのかな？

きっと、そこでどんな風に幸せに生きるか

たくさん工夫していたし、

その場所だから手に入るものを

たくさん知っていたんだ。

そしてその暮らしは、

ちゃんと今につながっている。

ちょっと見方を変えると、その痕跡を

そこら中で見つけることができるよ。

それから。

実は、自分の地域の違う一面が見えてくると、

隣りの地域のことも違って見えてくる。

地面も海もつながっているし、

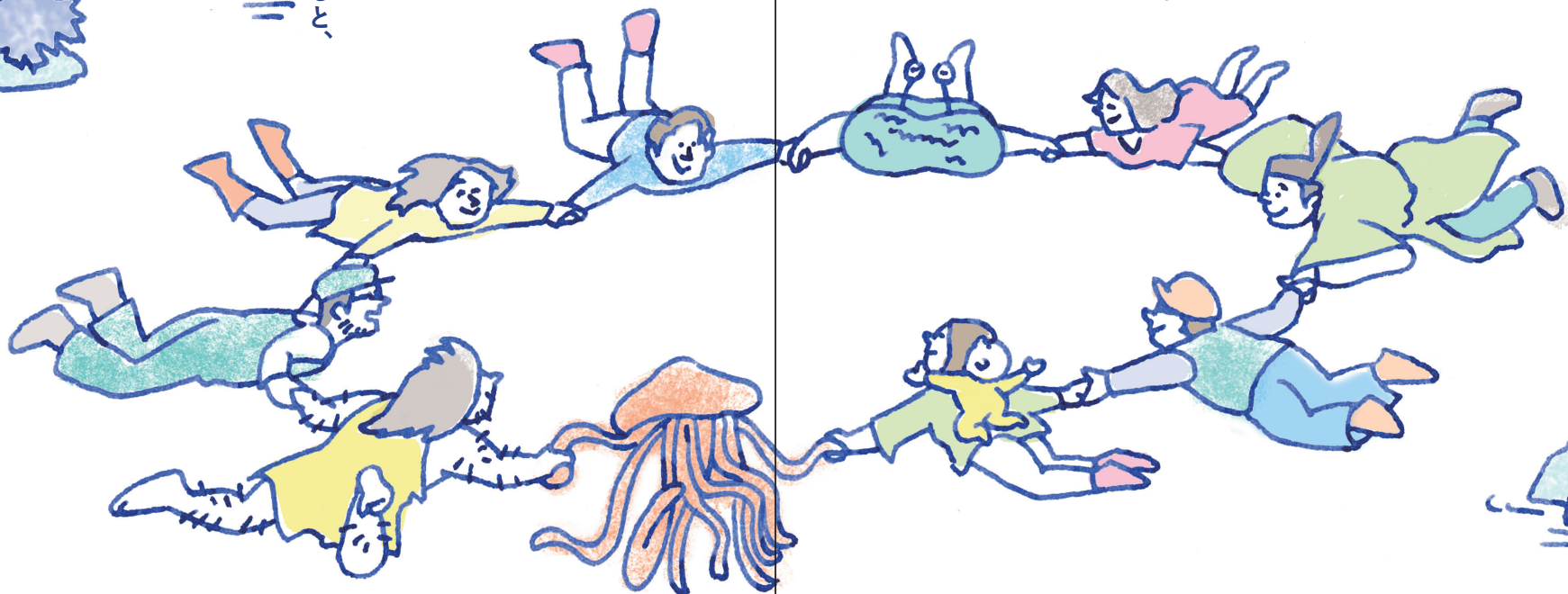
隣りの地域の人たちも、

やっぱり工夫して生きてきたから。

次は、自分の地域と隣りの地域が

どんな風につながっているのか

探してみても面白いよ。



つながる湾

プロジェクト

について

新しい視点を得ることで 見えてくる「つながり」

大沼剛宏（つながる湾プロジェクト代表）

つながる湾プロジェクトは、宮城県の松島湾をフィールドに、私たちを育んできた湾域の文化を再発見し、味わい、共有し、表現することで、地域や人・時間のつながりをとらえなおそうとする試みで、2013年にスタートした。

私たちの住む地域で「湾」の存在を意識するとき、身の周りの多くの事柄が見えないところでつながっていることに気づく。そのつながりは、現在の行政区が決められるはるか以前から、湾の風土を背景に海と人との関わり合いながら培われてきたものだ。それらを紐解き、つながりを見つめ直すことで、まずは私たち自身が、湾域に暮らすことの豊かさや楽しさをあらためて実感することができた。

つながる湾プロジェクトの活動には、大きく分けてインプットとアウトプットがある。

インプットは、知ること、学びが目的だ。座学の勉強会もあるが、それだけではなく、「身体を使って知る」ことを大切にしてきた。地域を知るには、その土地に出掛けて、現地を歩いて、眺めて、感じる事が一番そして、道すがら出会った人に話しかけてみる。地元ボランティアガイドさんの話を聞く。それだけで、今まで気がつかなかった小さな発見がたくさんあった。地域の事に詳しい人は、少し周りを見渡すと見つかる。行政、観光協会、郷土施設で働いている人などはもちろん、農家や漁師さんなど、それぞれ専門領域は違うが地域のことをよく知る人に勉強会やフィールドワークで話を聞いてみると、自分たちが暮らす町の事、史跡の調査記録や研究資料、日々の暮らしから昔の思い出話まで、興味深い話がたくさん出てくる。そうした人たちとの出会いが、私たちを「新たな視点」に気づかせてくれ、その「気づき」がプロジェクトを動かす支えになってきた。

アウトプットは、インプットで得た新たな視点を表現し、共有することが目的になる。その方法は、アートだったり、実践型のワークショップだったり、フォーラムや展覧会だったり、テーマや目的によって変わる



停泊させた舟の横で地元の人たちと語らう
「TANeFUNeカフェ」



かつてあった喫茶店のカレーの味を
復活させた「浦戸食堂」



地元の漁師の方と、タイムカプセルの
沈め方について打ち合わせ



地元ボランティアガイドの方に
案内していただき、フィールドワーク



湾の勉強会

勉強会修了後はみんなで講師を囲み、話しが尽きない

松島湾沿岸部の文化や歴史について学ぶ勉強会を不定期で開催。地元の歴史を研究している方や生産者、文化人等多様なゲストを招く。

さまざまな人に参加してもらうため、カフェを会場にすることも



が、共通するのは「視点」だ。海からの視点。伊達政宗公の視点。漁師の視点…などなど。いろいろな視点を体験することで、松島湾域の文化をさまざまな角度からとらえられるように工夫している。

こうして、現地を訪れて知り得たこと、話に聞いたことなど小さな発見の積み重ねが、再構成され、さまざまな表現となつて昇華する。一つ一つは小さな発見でも、さまざまに視点を变えて湾を俯瞰したとき、湾域の文化に欠かせない「つながり」に気づく瞬間がある。プログラムを通して共有し伝えたいことは、形を持たないその「つながり」なのだ。それは、湾の風土と向き合い、文化を担った先人を敬うことであり、この地域に暮らす私たち自身のアイデンティティを見つける行為でもある。

土地を知り、歴史を知り、旬の魚介を食べ、島で遊び、松島でお月見をし、ハゼ出汁で雑煮をつくる。つながる湾プロジェクトで取り組んできたことは、日常の中に湾を楽しむ余白をつくることだ。この素敵な湾が時代を超えて私たちと共にあることを誇れる、そんな気持ちを発見できる瞬間を作り、湾域に暮らすことの豊かさや楽しさを未来に向けて共有していきたい。



「湾の記憶ツーリズム」では漁師さんの船で湾上を移動した



浦戸諸島の記憶をたどった「湾の記憶ツーリズム」



生きたまま肝を抜いたハゼを串に刺し、炭火で焼く



仙台雑煮の具は大根や人参を凍らせた引き菜、イクラなどが特徴的



ハゼの出汁のとり方を学ぶ



松島湾とハゼ

釣り船での釣り体験は、
子どもも目を輝かせる

仙台地方の食文化の一つに、
松島湾で獲れるハゼで出汁
をとった「仙台雑煮」があ
る。松島湾で豊富に獲れる
ハゼは、丁寧に焼かれた後、
薬で結んでお正月まで軒下
に吊るされていた。ハゼ釣
りから焼き干し作り、そし
てお雑煮作りまで、松島湾
と深く関わる営みを自分の
ものとして体験する。



生きたハゼの捌き方を地域の名人から教わる



伝統漁法「数珠釣り」の「数珠」は、
餌を通した針金を撚り合わせて作る

〈寄稿〉自分が住む土地との 関係を編み直す

五十嵐靖晃（アーティスト）

《そらあみ》は、参加者と共に漁網を編み、出来上がった網を空に掲げ、網の目を通して土地の風景を捉え直すアートプロジェクトだ。全国12箇所で展開してきたが、つながる湾プロジェクトでは、これまで「浦戸諸島（塩釜市）」「瑞巖寺と雄島（松島町）」「多賀城政庁跡（多賀城市）」の三箇所で、松島湾という一つの大きな湾をつなぐように、そらあみを行ってきた。その都度、土地の歴史や風土や暮らしの話を地元の人から聞き、松島湾から届く潮風を肌を感じながら多勢の手を借りて編むことで、その土地と湾との関係性をもう一度編み直してきた。

実は、人の手で網を編むときの、その編み方も、使う道具も、縄文

時代以前から変わっていない。だから、そらあみを黙々と編んでいると、「昔の人もこうして編んでいたんだなあ」などと想像し、ふと現在ではないどこかにタイムスリップしているかのような感覚になる。それはまるで、編むという、時間を越えた普遍的な所作が、普段眠っている身体感覚を開き、その土地に連綿と流れる時間へと誘ってくれるかのようだ。

そうして完成した網の目を通して、浦戸諸島では「湾の上（島）に暮らす人々の視点」、雄島と瑞巖寺では「霊場の月を愛でた（江戸時代の）人びとの視点」、多賀城政庁跡では「（大和朝廷との）国境を眺める蝦夷（えみし）の人びとの視点」を捉えようと試みた（P 72〜73）。それぞれ場所も時間軸も違うが、3つの視点に共通するのはその時代の《湾へのまなざし》であったと思う。時代は違っても、この地に生きる人びとは、いつの時代も湾を見つめ、湾と関わりながら命をつないできた。そらあみを通じて重ねた視点は、その時代ごとに松島湾に生きた人びとの生き様であり、文化そのもののものだ。

では、現在の松島湾に生きる人たちはどのように湾を見つめ、どの



手を動かしながら会話が弾む。面と向かって話すのとはまた違った時間になる



子どもも大人も一緒に編む。小さな子ども糸巻きなどで役割を担うことができる

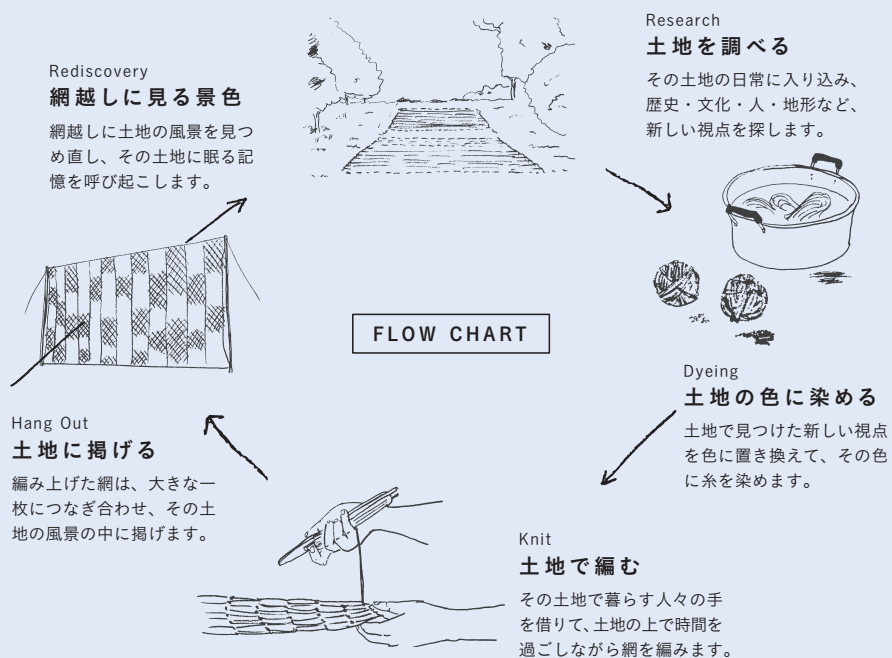


コマに編み目をひっかけて引っ張りながら、網針で糸を編み込んでいく



網を編むのに使う道具は網針（あばり）とコマ。有史以前から同じ形だという

PROCESS OF SORAAMI



五十嵐靖晃

東京藝術大学大学院修了。土地に住み、そこで出会う人と共に、普段の生活に新たな視点と人の繋がりをつくる試みを行う。代表作は、福岡県太宰府天満宮との協働プロジェクト「くすかき」、住民たちとともに新たな風景をつくり上げる「いろほし」「そらあみ」など。

参加者と共に漁網を編み上げ空に掲げることで、網の目を通して土地の風景を捉え直す、アーティスト五十嵐靖晃によるプロジェクト。つながる湾プロジェクトでは、松島湾を囲む土地に記憶された物語を丁寧に紐解き、一夏をかけてその地で暮らす人びとの手を借りて共に編み上げ、空に掲げました。

そらあみ



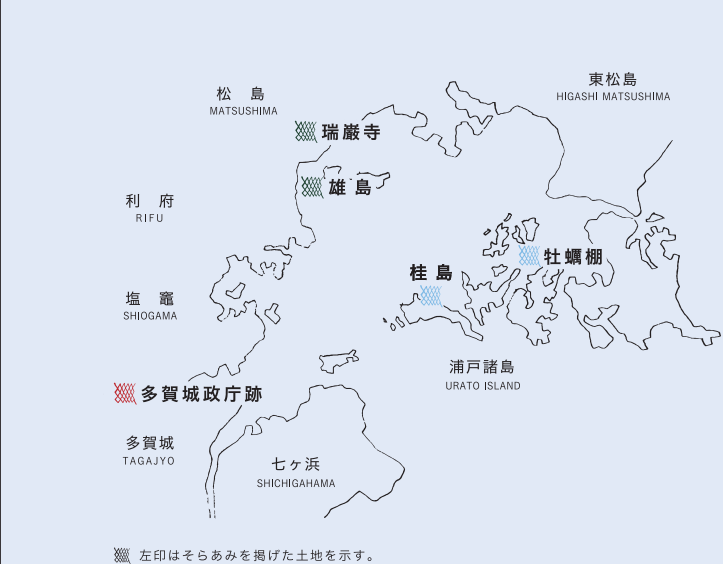
そらあみは、近づいて触ることもできる。網との関わり方にもバリエーションがある



完成した網越しに景色を眺める。作品の存在はその場所に滞在するきっかけも作る

ように湾と関わりながら生きるのか。
つながる湾プロジェクトがやろうとしていることは、今、そこに生きている人のまなざしを、次世代へと伝えることなのではないだろうか。そこには、その場所に生きる人へのみ許された文化の継承という豊かさがある。継ぐことはつくることなのである。

誰かと会って自分を知るように、どこかに行って元いた場所を知るように、自分が住む土地を見つめるいくつかの視点を得ることで、見えてくるものがある。自分が何者で、どこからきて、今どこにいて、これからどこへ行こうとしているのか。土地との関係性を編み直すことで、その場所に生きる自分の今と未来が見えてくる。



右上：浦戸諸島朴島付近の牡蠣棚（2013）。湾の上に暮らす人びとの視点で海を捉えた。

右下：松島の雄島（2014）。霊場の月を愛でた江戸時代の人びとの視点で月を捉えた。

上：多賀城政庁後（2015）。蝦夷の人びとの視点で大和朝廷との国境（政庁の南門）を捉えた。



「体験型」プログラムで 地域に出会う きっかけを作る

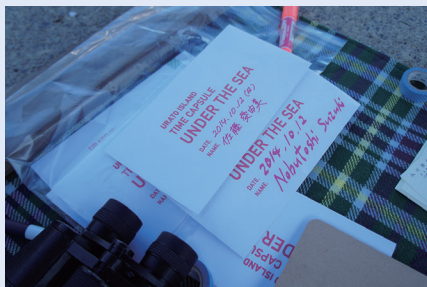
高田彩（つながる湾プロジェクトメンバー
／ビルドフルーガス代表）
聞き書き 谷津智里

つながる湾プロジェクトのプログラムを作るときに大切にしているのは、「体験型である」ということだ。見る、聞く、知ることも大切な一歩だが、それに留まらず「体験すること」。これによって、参加者自身の感性を開いてもらうことができる。自分自身が作業し、自身自身の感覚を表に出すことによって、「ヒトゴト」を「ジブンゴト」に変化させることができるのだ。

「語り継ぎのためリーディング」の「歌い継ぎ」（右下写真）では、

松島湾に伝わる物語をミュージシャンに歌にしてもらい、題材になった物語も聞いてもらった上で、歌詞を参加者それぞれに考えてもらった。こうすることで、出会った物語に想像力を働かせる余白が生まれる。土地の物語を語り継ぐ場合にとっても重要なのが「今の時代の価値観を添える」ということ。民話も、実は「その時そこで生きていた人がどう考えていたか」を伝えるものだから、「その時そこにいた自分がどう感じたか」を伝えればいいと感じてもらったための工夫だった。また、行う内容は参加者のスキルに合わせることも大切。「漂流民たちがはじめて食べたパン作り」は、江戸時代の漂流民が教わったロシアのパン作りを疑似体験するワークショップだったが、当時のままのパンを再現することが大切なのではなく、そういうものに触れることで「どんな味だったんだろう?」「初めての味に出会ってどんな気持ちだったんだろう?」と想像することの方が大切なのだ。

「海底タイムカプセル」（P75〜76写真、P79）は「海への意識」を作る効果がある。海辺の町に暮らしていれば、本来は海と自分の暮らしには深い関係があったはずだが、現代の生活ではなかなか海を意識することができない。でも「自分が書いた手紙」という「自分の一部」



念のため、手紙が水に濡れないようにビニール袋に入れる



タイムカプセル（右）に手紙などを入れ、木箱（左）に入れて海に沈める



物語の朗読後に、同じ物語をテーマに若手民謡歌手が作った歌を聴く



地域の物語から想像を膨らませて歌詞を作り、アーティストが作曲した曲にのせて歌う

を海に沈めることで、海が自分にとって関係のないものではなくなる。それが、海と自分との関係を構築し直すきっかけになるのだ。このプログラムではさらに、タイムカプセルを沈めるというイベントが終わりから、カプセルが海中に沈んでいる期間を通してそれを意識することによって、個人がそれぞれの感覚・速度で海と関係性を持ち続けることができる。

「海辺の記憶をたどる旅展」(P 77 写真、P 80 ~ 81) は、つながる湾プロジェクトが出会った湾の財産を広く共有するために企画した展覧会だが、松島湾の島々をめぐるスゴロクをしてもらうことによって、そこで出会うさまざまな人や物事を疑似体験してもらった。会場ではそらあみ(P 68 ~ 73) も編むことができ、「語り継ぎのリーディング」の作業編として、漂流民が出会ったロシア皇帝の勲章を作ってもらったり、海底タイムカプセルに入れる手紙を書いてもらうこともできるようにした。このようにして同じ会場内でさまざまな体験をもらうことで、滞在時間を長くし、いろいろな側面から湾の文化に出会ってもらうことができるように考えた。

自分が暮らす地域に関心が薄い人は、知るきっかけが無かっただけという場合が多いように思う。きっかけさえあれば、自分の暮らす地域を愛せるし、愛着を持つこともできると思う。そのためには学びの場を提供するだけではダメで、「楽しい」という感情とか、純粋な好奇心をかき立てる必要がある。紹介したような方法はそのために有効だが、魔法の杖ではない。人の心はそんなに簡単に変わるものではなく、気づきが多面的に積み重なることによって、少しずつ変化していくものだと思う。だから、そんなに難しくなく、繰り返し継続的に行うことができるというのもポイント。同じ地域、同じテーマでいろいろな側面での体験を積み重ねることで、だんだんと地域との関係が自分のものになっていくのだと思う。



グルーガンを使って漂流民の勲章づくり。
子どもたちも夢中になる



「海辺の記憶をたどる旅展」の会場内でも
そらあみを編むことができる



「タイムポスト」に手紙を投函すると、
未来の自分に届く

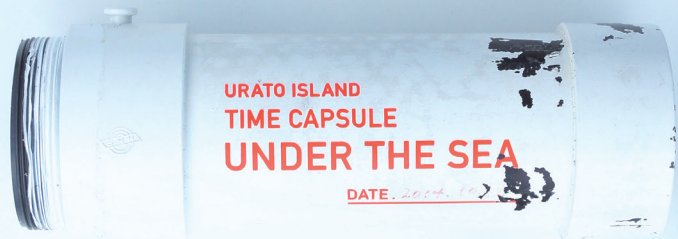


地元の漁師さんに協力していただき、
カプセルを沈めに行く

海底タイムカプセル松島湾



参加者が書いた手紙（「記憶」をタイムカプセルに封入して松島湾に沈めるプロジェクト。海底タイムカプセルは松島湾の底で数年間の眠りについた後に引き揚げ・開封され、手紙は参加者の元に送り届けられる。



海底に一年沈めて引き揚げたタイムカプセル（下）と外箱（上）。海中にある間に貝や藻など、さまざまな生物が付着し、育っていた。



カラフルな材料をどう組み合わせるか、ロシア皇帝の勲章に会った驚きを想像する



地域の物語や先人の知恵を、今を生きる私たちが自分事にして語り継ぐきっかけを創出する取り組み。朗読、歌、詩、時には調理や衣類の制作を通して、同じ土地に生きた先人の物語に想像を膨らませ、自分たちの価値観を添えて次世代へ語り継ぐ。

個性豊かな作品が出来上がるとともに、地域の物語を伝えることができる

語り継ぎのためのリーディング（ワークショップ）



会場のあちこちに体験ブースが並び、参加者はそれらを巡ることができる



「海底タイムカプセル松島湾」に入れる手紙も会場で書き、ポストに投函することができる



子どもたちが調べた地域の歴史を展示発表。取り組みを伝える新聞も閲覧できるようにした



松島湾の西端（塩釜港）から東端（東松島市の宮戸島）まで、島を渡る旅を再現したスゴロク

つながる湾プロジェクトの活動の成果をより広く共有する展覧会。見てもらうだけでなく、体験してもらったり、参加者自身が主役になれる場面を多く作るよう工夫して構成する。

海辺の記憶をたどる旅展



地域に伝わる物語を自分の言葉で大人たちに伝える



江戸時代の若宮丸の漂流記を、出発地点である石巻の子どもたちが紙芝居にし、発表した

解説 ドアをノックするのは誰だ？

橋本誠（アートプロデューサー／一般社団法人ノマドプロダクション 代表理事）

この本を手にとっている方は、地域活動に興味のある方だろうか。アートプロジェクトに興味のある方だろうか。あるいは、松島湾地域やつながる湾プロジェクトに関わりのある方だろうか。いずれの立場の方にも、普段の活動や興味にふれる部分のある内容に仕上がっており、イラストやマンガを交えて楽しく読んでいただけるものであると思う。

近年、国内の様々な地域で、その土地の魅力を多様な形で引き出すアートプロジェクトが行なわれている。アートプロジェクトが多く集客や経済効果を生み出すことにつながるという活性化の事例などもあるが、つながる湾プロジェクトはこの本で、そういった多くの人にもたらす成果としての結果の部分よりも、生活者などが個々に関わることで日々の生活がどのように豊かになるのかという、プロセスを重視した価値を丁寧に抽出している。普段は東京で生活をする私も全国各地のアートプロジェクトに足を運んだり、関わったりする機会が多いが、この本の「KNOCK!」「STEP!」「JUMP!」それぞれの項目の中に、他の地域での事例を思い起こさせる内容があり、それを楽しく頭に描き、納得しながら本書を読ませていただいた。

「KNOCK!」に挙げられているのは、地域と出会い直してみようというきっかけに関すること。私もここ数年、ただ漫然と素っ気ない雑居ビル街に仕事や生活の拠点を追っているが、近所のお店で遭遇した、地域に初めて訪れた方と話してみたり、「この地域で何かプロジェクトができないだろうか」と妄想してみたりするだけでも、かなり見え方が変わる。アートプロジェクトの現場に足を運び、アーティストやリサーチャーのように、様々な地域を訪れている人と時間を共にする時、彼らの視点や、スキルのようなものに心を動かされることも多い。自らが住んでいた、関わっていたりする地域のことは分かっているつもりでも、見えていないことが必ずある。自分たちとは異なる地域への眼差しは、些細なことでも面白いものだ。それは、受け入れる側に立つ時だけではなく、自分が異なる地域に足を運び、そこで出会った人々との会話の中でも気づくことがあるし、出会った人々の方でも発見があるかもしれない。

「STEP!」は、KNOCK!の視点をより深めるリサーチの視点だ。自らが関わっている地域にしても、訪れる地域にしても、時を変えたり、異なる人と行動を共にしたりするだけで、見えてくるものや、入ってくる情報が大きく変わる。興味のある地域や、そこで接した事柄、人について、一歩踏み込んでみるとさらに世界が開けるのだ。例えば私が2008年より関わっている、横浜の寿町という地域におけるアートプロジェクト「KOTOBUKIクリエイティブアクション」（主催：寿オルタナティブネットワーク）において、アーティスト・浦田琴恵の提案により始めた勉強会や、様々な切り口で企画したツアーでも、実に様々な視点を提供してもらったことができた実感がある。勉強会やツアーを企画するプロセス自体にもリサーチが必要になるし、実際の参加者からの声も含めて、その場で生まれるコミュニケーションからも得るものが非常に多い。

つながる湾プロジェクトらしさを特に感じさせられたのが、「JUMP!」の項目である。町の文化や習慣で気になったものを「恒例行事にしてみる」という敷居の低い内容にはじまり、「物語や歌にしてみる」「手紙を書く」などという、現代的な生活を送る私たちが、いつの間にか日常的には頻繁に行わなくなってきた「表

現してみること」が提案されている。例えば私が参加した、浦戸諸島でのプログラム『浦戸食堂 まりこさんのカレーとその記憶』。塩釜港から船で湾の景色を眺めながら寒風沢（さぶさわ）島を訪れ、東日本大震災の前まで存在していた喫茶店のカレーライス（再現版）をスタイリッシュに演出された公民館の大きなテーブルの前で、参加者の方々と肩を並べて一緒に食す（P63右写真）。アーティスト・増田拓史の視点をもとに、プロジェクトメンバーと共に進められたリサーチを経て設えられた食事は、様々な方が記憶や時間を楽しく共有することのできる場であった。それは、プログラムがツアーやカレーを食べるだけにとどまらず、一連の体験を綴り込むことのできる冊子に参加者自身の手で製本するという、「表現」してみることまでを含んでいたからだったのではないかと思う。「記憶を紡ぐ糸」としてパッケージされた糸を使い、各々が限られた時間の中で少しでもきれいに仕上げようと奮闘する。この日だけの参加者も、共につながる湾プロジェクトをつくりあげるメンバーになったような喜びを感じられるひと時だ。少し大変だけれども、こうして手を動かすことで「記憶」は留められ、口述とは別の「表現」「記録」として伝えることができるようになる。しかもこれは、和綴じができるプロジェクトメンバーのスキルを生かした内容だったと聞いた。

つながる湾プロジェクトのプログラムの多くが、このような、作品をただ「観る」だけではない体験型であり、アーティストに限らない個性豊かなメンバーや、参加者の手による「表現」の場なのだ。たくさんの方にしてもらい、大きな感動を与えるプロジェクトというよりも、小さくても丁寧に「体験」や「表現」を通してテーマを自分ごとにしてもらえる、「JUMP」できる場。そこにアーティストやアートの手法が取り入れられている。

最後に、この本に書かれていることの生かし方について。これはと思った部分だけを日常レベルで実践してみるのがいいだろうし、何か具体的なプロジェクトを進めている人であれば、既に取り組んでいることも含まれているかもしれない。それをさらに充実させるためのKNOCK！／STEP！／JUMP！であるが、これも意識して順番に実行しなければいけないというものでもなく、自然に繰り返されるのが一番豊かな状態だと言ってもいい。5年目を迎えて益々充実するつながる湾プロジェクトでもきっとそうになっているに違いないが、私が2009年～2012年にかけて関わっていた「墨東まち見世」（主催…東京都、東京文化発信プロジェクト室、NPO法人向島学会）においても、年を重ねるごとに、普段から地域でささやかな表現活動やものづくりに関わる人、まちづくりに関わる地域の人の日常的な活動と、招聘アーティストによる活動がそれぞれにKNOCK！／STEP！／JUMP！する、豊かな状態を感じることができるようになっていた。地域の人は知識や技術、アーティストは視点を提示して、お互いが気づきを得ながらアートプロジェクトが生まみ出される。それをきっかけに、自ら行動するのが得意な方などが、新たな活動を立ち上げそれがまた様々な視点やそれを共有する場を生み出していく。そんな状態だ。

扉を順番に開ける必要なんてないし、開けるのはこの本を読んでいるあなたとも限らない。地域の中で失われがちな多様な関係性やコミュニケーションが紡ぎ直される中で、自然にそれぞれの扉は開いていくだろうし、ふとした時にこの本のことを思い出して、意識して開けてみるのも面白いはずだ。

橋本 誠 1981年東京都生まれ。横浜国立大学卒業後、フリーのアートプロデューサーとして活動。2009～2012年、東京文化発信プロジェクト室（現・アーツカウンシル東京）で「東京アートポイント計画」の立ち上げなどを担当後、一般社団法人ノマドプロジェクトを設立。芸術祭やアートプロジェクトに関わる企画制作や人材育成プログラムを手がけている。主な企画にKOTOBUKURIエイティブアクション（横浜・寿町エリア／2008～）など。TARL（Tokyo Art Research Lab）事務局長（2012～）。

ノック！

—じぶんの地域ともう一度出会う10の扉—

発行日 2017年3月23日

監修 つながる湾プロジェクト

企画・編集 谷津智里

マンガ・イラスト uwabami

デザイン 土澤 潮(デザイン事務所 ペイジ)

協力 藤崎家

印刷 今野印刷株式会社

発行 つながる湾プロジェクト

つながる湾プロジェクト

「つながる湾プロジェクト」は、私たちを育んできた松島湾とその沿岸地域の文化を再発見し、味わい、共有し、表現することで、地域や人・時間のつながりを「陸の文化」とは違った視点でとらえなおす試みです。<http://tsunagaruwan.com>

主催：つながる湾プロジェクト運営委員会、東京都、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)

協力：ビルドフルーガス、一般社団法人チガノウラカゼコミュニティ
※本事業は ArtSupport Tohoku-Tokyo(東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業)です。

Printed in Japan. Copyright 2017 TSUNAGARU WAN PROJECT. All rights reserved.

